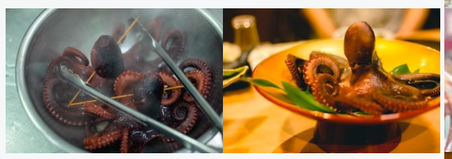
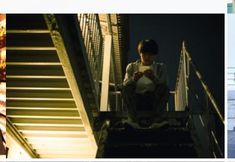
あらすじ

フグとタコと僕らのミライ

鈴木大洋（17）は、フグとタコで有名な愛知県の離島・日間賀島に住む高校三年生。
幼少期から「4代目」と呼ばれて育ち、中学生まではそのことに何の疑問も持たなかったが、島外の高校で友人と交わるうち、
島独自の文化や風習、「4代目」が決定づけられていることに疑問を抱くようになり、自分の将来はこれでいいのか？という気持ちに駆られる。
かといってこの島が嫌いというわけでもない。なのに最近、島から抜け出そうとする夢を頻繁に見るようになった。
自分の本当の気持ちがわからず、具体的な目標もなく、悶々とする大洋。
いつものように旅館の手伝いをする大洋は、名古屋から来た女子大生、**松田凛空・佐野晴香**とともに島を巡る。
自分にとってはありふれた風景にいちいち感動する凛空と晴香。大洋は都会の雰囲気を纏った二人に自分の知らないキラキラした世界を想像する。
夜の砂浜で一緒に過ごした凛空の話も、広い世界の素晴らしさに満ちていてワクワクした。
二人が旅館を去るとき、凛空は日間賀島郵便局のタコの消印のハガキが欲しいから、と自分の住所を走り書きしていく。
共に過ごした時間に運命的なものを感じていた大洋は、凛空との繋がりが消えなかったことに内心ときめいていた。



ある晩、大洋は当然のようにここを継ぐ前提で話をする父親とぶつかり、フェリーで島を飛び出す。
ポケットにはわずかなお金と、凛空の住所のメモがあった。スマホも財布も持たない大洋は、唯一知っている住所である凛空のマンションを訪ねる。
しかし『メゾン中島』と聞いていたマンションは、『中島荘』という古びたアパート。しかも凛空は、彼氏らしき男、**水谷冬也**と一緒に帰ってきた。
島でのひとときの出会いで凛空の家まで来てしまった自分を恥じ、その場を離れる大洋。
行くあてもなく途方に暮れる大洋に声をかけたのは、さきほどの男、冬也だった。冬也に連れられてやってきたのは、イルミネーション輝く名古屋。
冬也が雇われ店長をしているパブで一晩を過ごす中、大洋はそこに集まった様々な人たちの人生を垣間見る。
明るく酒を飲みに来る人たちにもそれぞれ事情があり、皆何かを背負っていた。華やかに見えた凛空も夢に折り合いをつけて地元で就職するという。
そんな状況でも「いつか未知の世界を旅する」という夢を持ち続ける凛空の前向きさに救われる大洋。
さらに日間賀島名物のタコしゃぶを振る舞うことで、自分の包丁の技術で人を笑顔にできることにも気づく。



名古屋での一夜の体験で、大人には大人の苦労があることを知った大洋。
島に戻ると、父から「自分の知らない世界を見て自分の可能性を広げろ」と背中を押される。
後日、凛空の元にタコの消印のハガキが届く。フグとタコのイラストに『福とご多幸をお祈りします』の文字。
それは困難の多かった凛空へ、そして自分自身の未来へのエールでもあった。